

出版王国を築いたパイオニア

おおはし しんたろう
大橋 新太郎 (1863-1944)

博文館ほか



『大橋図書館四十年史』
より

§ 人物データファイル

出生

文久3年(1863)越後長岡城下の上田町裏一ノ町(現・長岡市本町1丁目)に生まれる。父は、長岡の商人・大橋佐平。新太郎には2人の兄がいたがいずれも夭折したため、嗣子として育つ。

生い立ち

幼少期を長岡で過ごす。豪放で伶俐、機敏な父に似ず、柔順寡黙、沈着重厚な子どもであったという。明治2年(1869)桃田斎(平潟神社神官)の寺子屋に入り、続いて、父佐平がその設立に関わった町民子弟のための学校、および長岡洋学校に入学、そして新潟師範学校講習所まで進み、同9年(1876)上京。当時、慶應義塾とならぶ秀才の淵藪と謳われた同人社(中村正直主宰)の少年寮に入った。しかし明治11年9月、天皇の北陸巡幸に際し父の手伝いのため帰郷。そのまま学問に取り組む機会を失い、以後、実業の道を歩む。同人社では徳川家達^{いえさと}、樺山愛輔^{かばやまあいすけ}といった人々と出会い、新太郎にとって貴重な人脈となったと指摘される。

実業家以前

同人社を去り帰郷した後は、佐平が長岡に創業した大橋書房を手伝う。大橋書房は当初、書籍雑誌の売捌所(書店)だったが、後に出版も手掛けるようになり『傍訓・改正徴兵令』などを発行した。大橋書房の商売の手法は、手間のかからない編集、廉価での販売、県下の書店への売捌きの依頼など、博文館と共通しており、博文館の商法の原点がここにあったといえる。

また同じ時期、やはり佐平が創刊した「越佐毎日新聞」の経営にも専ら

新太郎があたった。いずれも、進取の気性に富み、思い立ったらすぐ行動する佐平が立ち上げ、経営感覚に優れた新太郎がそれを受けて地道に経営していくという大橋父子の会社経営の姿が表れており、これはそのまま博文館にも受け継がれていく。

実業家時代

明治20年（1887）6月15日、『日本大家論集』（集録雑誌）の発行により博文館が創業する。創業者は、その前年上京していた佐平である。とはいえ『日本大家論集』のアイデアは新太郎のものであり、また、翌21年春には新太郎も上京して経営体制を整えていった。以後、新太郎の経営により、博文館は雑誌『太陽』や叢書『帝国文庫』などで知られる総合出版社として、関連会社の東京堂などとともに昭和戦前期まで出版界に一時代を築いていく。

しかし、新太郎は一出版社の社長に収まっている人物ではなかった。博文館が軌道に乗ると、出版人から財界人へと飛躍していく。その端緒は東京馬車鉄道会社（のちの都電）であったが、何より財界に伸していく足掛かりとなったのは東京瓦斯会社であった。というのも、新太郎はここで渋沢栄一の信頼を得、そこから次々と大企業の経営に参加するようになったのである。関わった会社・団体の数は50以上といわれる。

政治との関わり

明治35年（1902）8月の総選挙で、東京都から衆議員議員として立候補しトップ当選する。しかし地租増徴に絡む議会の混迷に失望し、一期務めたのみで辞職。再び衆議院議員に立候補することはなかった。

次いで大正3年（1914）東京市会議員となる。これは、豊川良平らとともに東京市会刷新をめざしたものであった。これも一定の役割を果たしたとして一期のみでその職を辞している。

その後しばらく政治からは距離を置いていたが、大正15年（1926）渋沢栄一の推挙により貴族院議員に勅選された。

社会・文化貢献

明治26年（1893）出版事業視察のため欧米を巡回した佐平は、各国で図

書館が広く普及しているのを目の当たりにし、大橋家の社会貢献事業として図書館設立を決意する。帰国後準備を進め明治34年2月には「図書館設立の趣旨」（起草 高山樗牛^{ちよぎゆう}）を発表するも、開館を待たずに同年11月3日逝去。佐平の意思を継いだ新太郎が、明治35年（1902）6月15日、財団法人大橋図書館を開館した。

大橋図書館は、新太郎の財政的支援と、後に館長となった坪谷善四郎の運営努力とにより好評をもって受け入れられ、関東大震災被災後もなお運営を続けたが、戦後、財政面のトラブルなどが生じ、西武鉄道^{やすじろう}の堤康次郎に全蔵書が引き継がれて現在の「三康^{さんこう}図書館」に至っている。

晩年

大正期になると、新太郎はますます財界人としての活動に軸足が移っていく。特に日本工業倶楽部★の設立に動き始めると、博文館の経営に手が回らなくなり、大正6年（1917）編集部を刷新、翌7年に株式組織にするとともに長男進一に社長を譲っている。しかし、編集部の刷新は企画力の低下を招き、また、進一は社長としての力量に欠けていたと指摘される人物で、この後博文館は衰退の道を歩むことになる。一方、新太郎自身は次々と新しい会社の役員や株主になり、昭和10年（1935）には日本工業倶楽部会長に就任するなど財界での存在感を増していった。

昭和19年（1944）5月5日、麴町の本邸で死去。享年80歳。東京・護国寺（現・文京区大塚）に眠っている。

関係人物

博文館は、学生の青田買いや血縁者の婚姻を通じて優秀な人材を集めた。

坪谷善四郎 越後加茂町（現・新潟県加茂市）出身。「越佐毎日新聞」に投稿していた関係で博文館創業時から編集を手伝い、東京専門学校（現・早稲田大学）学生であった明治21年（1888）3月頃には博文館に入社している。その後、大橋図書館の館長も務めた。博文館とともに歩んだ人物であり、博文館社史や伝記など、大橋父子の足跡をたどる資料の多くが坪谷による執筆である。

また、日本の図書館発展に寄与した人物としても知られ、旧・都立日比谷図書館の前身である東京市立図書館建設を実現した。

大橋（渡部）乙羽 硯友社同人の作家で、明治27年（1894）尾崎紅葉を晩酌人として大橋家の人となった。博文館支配人として営業・編集いずれにも才能を発揮。また、樋口一葉の才能を評価し世に送り出した人物でもある。博文館を託されるべき人物として期待されたが、明治34年（1901）6月、31歳で死去した。

大橋（森垣）光吉 博文館入社（明治27年）後、徴兵のため一旦退館したが、明治31年（1898）に除隊し、大橋家の三女幸子と結婚して大橋姓となった。これと同時に、博進社印刷工場（後の共同印刷）を任されるようになりこの発展に大きく貢献した。大争議となった共同印刷の労働争議には社長として対処している。なお、この争議には徳永直すなおが参加しており、後にこれを題材に『太陽のない街』を執筆した。

エピソード

新太郎は、明治17年（1884）20歳の時に結婚しているが、同30年に離婚し、紅葉館館妓であった須磨子と再婚した。須磨子は、巖谷小波いわやさなみと相思相愛の仲であったが、巖谷が京都の新聞社に迎えられて東京を留守にしている間に、新太郎と恋仲になり結婚した、と伝えられる。尾崎紅葉の『金色夜叉』はこれをモデルに描かれたものである。

巖谷はこの出来事にも関わらず、その後博文館編集部に入り少年少女向けの読み物を多く手掛けた。しかし、博文館退社後の昭和2年（1927）、新太郎との間に版權問題が生じた際、新太郎の私生活を暴露した『金色夜叉の真相』を刊行している。

キーワード

日本工業倶楽部 第一次世界大戦ごろの急激な産業発展の中で、銀行家などが強い発言力を持っていたのに対し、工業資本家は相対的に低い地位にとどまっていた。この状況を打開し、政府の経済政策への影響力を高める目的で日本工業倶楽部が創設された（大正6年）。新太郎はこの準備段階から中心的なメンバーの一人として関わった。同倶楽部は、経済や労働

の問題に取り組む経済団体として活動を続けたが、現在は、財界の社交団体に性格を変えて存続している。

神奈川との関わり

現在の横浜市金沢区周辺は、伊藤博文をはじめ要人の別荘地として好まれた土地で、大橋新太郎も称名寺の隣接地に別荘を建てた。

昭和3年（1928）神奈川県は天皇即位の御大典記念として図書館施設の設置を企図し、金沢文庫をこれに充て再興させることが計画された。この時、この地と縁があり、自らも私設図書館を設立するなど図書館への理解もあった大橋新太郎が、県の予算額と同額の5万円の寄付を表明し計画が実現することとなった。新太郎は、金沢文庫の経営を神奈川県が永久に維持することを寄付の条件としたという。

新太郎は、県立金沢文庫発足（昭和5年8月）後も、資料の修理費用や備品等を寄付し、金沢文庫再興に寄与した。

§ 文献案内

社史

出版社・博文館は、関連業すなわち、取次業（東京堂）、印刷業（後の共同印刷）、製紙業（博進社）の会社を同族によってそれぞれ立ち上げ、いわゆる“博文館コンツェルン”を築き上げた。

『博文館五十年史』坪谷善四郎著 博文館 1937〈Y、K〉

博文館刊行の社史としては唯一のもの。編年形式で創業から昭和12年（1937）までを記述する。博文館の50周年記念に編纂されたものだが、奥付の表記は、社としての編纂というよりも坪谷の著作としての体裁をとる。巻末に出版年表（博文館の刊行物一覧）あり。

『大倉紙パルプ商事株式会社100年史』大倉紙パルプ商事100年史編纂委員会編 大倉紙パルプ商事 1989〈Y、K〉

博文館コンツェルンの一角であった博進社は、その社名下では社史を発行していない。本書は大倉と合併後の社史で、うち1編が博進社の記述に割かれている。

『共同印刷百年史』共同印刷株式会社社史編纂委員会編 共同印刷 1997
(Y、K)

90年に続く2冊目の社史。前著を再録した100年の通史となっている。「前史」として博文館、博文館印刷所および精美堂についても記述される。巻末には大橋佐平上京（明治19年）以降の年表を掲載。

『ものがたり・東京堂史』田中治男著 東販商事 1975 (Y、K)

『東京堂百二十年史』大橋信夫編 東京堂 2010 (K)

85年、100年に続く、東京堂3冊目の社史。既刊2冊の内容を再録して創業から平成22年まで記述され、概ね社長ごとに時代を分けた章立てで全8章からなる。

戦前の東京堂は、取次業の雄として日本の出版流通システムの確立に深く関与した。このため、当時の出版業界の動向を伝える資料にもなっている。

伝記文献

『大橋新太郎伝』坪谷善四郎著 博文館新社 1985 (Y、Yかな、K)

博文館50周年（昭和12年）に際して執筆されたもので、大橋新太郎のまとまった伝記としては唯一のもの。被伝者と近い立場であった著者によって、被伝者存命中に執筆された。なお、新太郎の最晩年については、年表のみの記載となっている。

「大橋新太郎 露伴・一葉が集まった博文館の八畳の応接間 近代日本の起業家たち 第19回」鹿島茂著 fai (142) 2001 p52-55 (Y)

「大橋新太郎 「博文館王国」を築いた出版人」浅岡邦雄[著] 『近代日本メディア人物誌 創始者・経営者編』土屋礼子編著 ミネルヴァ書房 2009 p129-135 (Y、K)

参考文献

『大橋図書館四十年史』坪谷善四郎著 博文館 1942 (Y、K)

大橋図書館に関する唯一の通史。『博文館五十年史』同様“当事者”である坪谷の執筆である。平成18年（2006）には博文館新社より復刻版が刊行された。

『神奈川県立金沢文庫60年のあゆみ』神奈川県立金沢文庫編 神奈川県立金沢文庫 1990 (Y、Yかな、K)

「大橋図書館の閉館事情」 森睦彦[著] 東海大学紀要 課程資格教育センター（2） 1992 p35-46 〈Y〉

『四十年史』以後、大橋図書館の公式な記録は見られないため、閉館の事情も詳細は伝わっていない。本論考は、当時の「図書館雑誌」や新聞の断片的な記事等を追って、閉館の経緯をまとめたもの。

『近代出版文化を切り開いた出版王国の光と影 博文館興亡六十年』 田村哲三著 法学書院 2007 〈Y〉

博文館の創業から終焉までを記述。特に社史には記載されない博文館の落日に多くのページが割かれている。

「大橋佐平と大橋図書館」 是枝英子[著] 大倉山論集（55） 2009 p23-63 〈Yかな〉

『四十年史』では記述の薄い、図書館開館への準備段階から説き起こした論考。
〈森あかね〉

コラム 実業家と美術館（1）

実業家は成功すると、美術品を集めたくなるらしい。美術品を収集する理由は、「財力の証として」「美術品・骨董品を集めるのが趣味」など様々であるが、「文化財が欧米に流出するのを防ぐため」に収集・保存をしていたという実業家もいる。また、これらの美術品を、美術館を創設して公開しているという企業も多い。その目的は、「コレクションを保存し、展示すること」か「コレクションを秘蔵するのではなく、広く一般に公開し、文化向上の一端に貢献すること」が多い。収集目的は異なっても、実業家が収集し保存してきたことで、結果的に我が国の文化が保存されてきたことに違いはない。また、それを公開している目的も異なるが、私たちが貴重な美術品を鑑賞できるということに変わりはない。